

東新潟中学校同窓会入会式 歓迎の言葉

東新潟中学校同窓会会長 小林 昌二

私は、第8回。1958年3月の卒業です。あれから60年余の歳月が流れました。

みなさんは、創立70周年記念を2年生で迎えた72回目の卒業生となる予定ですね。

今日は、いち早く、我が同窓会のもっとも若い、新しいお仲間となる皆さんのご卒業を、お祝いし、前途洋々たらんことを祈り、ここに入会を心より歓迎いたします。

さて今、日一日と夜明けが早くなり、木の芽も膨らみ、本格的な春の訪れが待たれる季節となりました。

皆さんも本年の春が特別な「十五の春」であり、緊張もあろうかと存じますが、ひとしおお目出度さが待たれることと存じます。

ところで皆さんは、今申し上げた「十五の春」という言葉を聞いたことがありますか？「十五の春」というのは、お察しのように高校入試のことです。この言葉には、あとに続きがありまして、「十五の春を泣かせない」というのが、“フル・フレーズ”です。

もう50年余りも前、高校入試をなくす教育改革を提案した、ある京都府知事さんの言葉でした。その後、東京や、大阪の知事さんも唱えていたかと思えます。

でも、もう忘れられて死語になっていますね。

ちょっと私事になりますが、私はその頃、二十代の半ばをすぎて、大学院生になっていました。そのころまでに私は、高校入試、大学入試、大学院入試、と入試を三回も経験していました。

なお申しますと、15の春はうまくいきましたが、しかし18歳と23歳との二回の春にはそれぞれ失敗をしました。

その失敗では、泣きませんでした。でも15の春に失敗していたらどうだったろうかと、今もこの季節を迎えると思い出して考えてみたりしますが、今以て分かりません。

18歳の入試は、五分五分かな、との思いで、コンディションは風邪気味で受験。23歳の入試では、就職先が決まらず、大学院でも受けてみるかという軽い気持ちでの受験。いずれも失敗でした。

さてうまくいった高校入試の記憶には、3月の穏やかに晴れた2日間。体調もよく、分かっていることを示せたと、思い出されます。

そう！「十五の春」の高校入試では、どうぞ体調を整えてまず自分をしっかり出せるように臨んでいただきたい、ということです。

またうまくいく、いかににかかわらず、試験の機会はおあることに留意して、気持ちを新たに未来に向かっていく、そんな粘り強い心構えで、前途を切り開いていって欲しいと思います。

世界は今、コロナ禍に地球の温暖化、今また武力行使という激動で深刻です。皆さんは既に本校で、コロナ禍の過ぎし難い日々を、家族や学校の仲間、そして先生方と「こころでよくつながって」自粛につとめ、自分のできる感染防止に取り組まれてきたことと存じます。

この体験は、今後必ず生かされていくものとご期待申し上げます。

これをもって、困難なコロナ禍で自らを育んだフレッシュな皆さんの同窓会入会を心より歓迎する言葉にしたい、と存じます。

(原稿起こし 主幹教諭 古市 茂)